

政治史から見るチャドの混迷 ～「南」の歴史的形成過程と「国家」の不安定化～

坂井 真紀子

目次

はじめに

1. 南部の地域住民
 2. 南部のアイデンティティ形成にかかわる要因
 3. 現在の政治状況にみるデビー政権の脆弱性
 4. 創られた境界線
- 結びにかえて

はじめに

アフリカ大陸中央部に位置するチャド共和国は、植民地時代は仏領赤道アフリカ (AEF: Afrique Equatoriale Française) に組み込まれていたが、1960年にフランスから独立して以降、繰り返される内戦と、クーデターによる独裁政権の度重なる政権交代を経験している。現在の大統領は、1990年に軍事クーデターで政権の座についた北部の少数民族ザカワZakawa出身のイドリス・デビー・イトゥノIdriss Déby Itnoである。歴代の政権と同じく、デビー政権も、複数の反政府勢力との対立による不安定要因を常に抱えている。2000年代に入り、北・東部における反政府ゲリラの活動が特に活発化し、チャドの政情はさらに不安定化している¹。

現在、アフリカにおいては「失敗国家論」が論じられ、国家の存続を危うくする諸要因の分析が盛んに行われている²。チャドにおける政治的状況も、この国家論の一例を示すことになる考える。チャドもソマリアなどと同様に失敗国家と論じられることがあるが、当然のことながらチャドには、チャド独自の歴史的背景がある。

独立後から現在までのチャドの政治的混迷は、しばしば北部イスラーム系遊牧民とキリスト教系の多い南部との地域間対立という図式で説明される。しかし、南北の単純な対立が垣間見られた時代もあるが、群雄割拠する北部同士の戦いの中で、南部も一つにまとまることができない複雑な構図がみられる時代もあった。

その一方で、チャドの日常生活に目を向けると、南と北を分け隔てる何らかの境界線が確実に存在する。それは、この地域がたどってきた歴史の変遷に埋め込まれた集合的な記憶といえるかもしれない。具体的に測ることのできない創られた境界線を論じることは難しい。だが、チャドの人々が日々経験しているコンフリクトの根底に何があるのか、そのことを問わずに、この混迷を解きほぐし理解することはできない。そのため、この地域がどのような変遷をたどり、現在の「国家」の形に行きついたのか、政治史をさかのぼって確認していく作業がまずは必要であると考え。本稿では、チャド南部地域の人々の政治的アイデンティティ形成の歴史的変遷に着目しながら、現在のチャドの政治状況を明らかにする。アフリカの国家論をめぐって多くの研究結果が蓄積されてきた。近年特に議論される破綻国家や崩壊国家といったペシミスティックな国家論もその成果の一部である。しかしそのようなアフリカ国家論に関する議論が明らかにしてきたもう一つの点は、アフリカ国家論が、多様な現実を見た上で初めて論じることのできる多様性を持つものであるという認識であった³。その多様性を見る軸として、それぞれの地域ごとの詳細な地域研究が、現実を理解するうえでは必要不可欠なアプローチであることも明らかになってきた。本稿では、主にチャドをフィールドとする政治学、歴史学、人類学などの研究者の考察に基礎を置きつつ、筆者自身のチャド南部での調査時（主に2003～2004年）の体験も加味しながら考察を進めていくこととする。

まずは、第1章で、チャドにおける南部の地域住民自身が持つ民族の区別に対する視点を提示し、エスニックグループへの帰属意識の多くがどのように形成されてきたかを探る。

第2章では、さらに南部における集団としてのアイデンティティ形成過程にかかわる要因について分析する。1990年代後半にチャド南部を詳細に

¹ 武内 2008

² 川端 2006。

³ Ibid.

調査した地理学者マグラン⁴が提示する歴史的視点に基づき、南部のアイデンティティ形成と崩壊に決定的なインパクトを与えた要因について考える。第3章では、2000年代から現在に至るチャド国内の政治状況を概観しながら、根深く複合的な対立を内包する国家の脆弱性について論じる。そして第4章で、日常的に存在する南北対立が政治的意図により「創られて」きた過程を考察する。

チャドや中央アフリカ等のアフリカ中央部に關する研究は、いずれの分野も数が少ない。本稿が、多少なりともその空白を埋めることができれば幸いである。

1. 南部の地域住民

ここで言うチャド南部とは、地理学的にはスーダン・サバンナ気候帯に属するチャド南部地域を指す。この南部を画する境界線は、国土の半分よりもかなり南に下がっている。イエズス会神父であり言語学者のクドライCoudrayの定義によれば、「南」は当然ながら南にある(!)。しかし実際には、シャリ La Chari 川の左岸とカメルーン・中央アフリカ国境に囲まれた部分のことを指す。じつにチャドの全国土の8分の1の面積である。その土地は最も人口密度が高く、非イスラーム教徒である漁民と農耕民が住んでいる⁵。そこに人口の約半分の人たちが居住している。年間降水量が800~1000mm前後あり、比較的農業に適した土地である。

他方、「北」といえば、「中央部、東南部のアムチマンの先までを含めた国土の残りの部分のことを言う。人口密度は低く、イスラーム教徒が大多数を占め、遊牧民が定住農耕民と共存する土地である」⁶。サハラ砂漠およびサヘル気候帯に属し、多くとも200~400mmという少ない降水量のため、主な経済活動は移動性の牧畜とわずかな穀物の栽培に限られている。

「北部人」と「南部人」という言い方があるが、そのどちらも単一の民族集団で構成されているわけではない。「北部人」も「南部人」も複数の民族集団から成っており、時には「北部人」、「南部人」それぞれの内部で様々な民族的対立が起きる場合

もある。

クドライが1992年に行なった調査によると、チャドの全人口のうち約29万人がイスラーム教(53%)、14万人がキリスト教(25%)、12万人が自然宗教(アニミズム)(22%)を信仰している。キリスト教徒とアニミストの大多数が南部地方に集中しており、その多くは最大の民族グループであるサラ・ガンバイSara-Ngambayeに属している⁷。サラに分類される複数のエスニックグループは生業からみれば、定住型の農業を営み、焼畑と輪作・混作を中心とした似通った農業技術を持っている。

しかしながら言語学的に見るとサラは多様性に富んでいる。厳密にはサラのエスニックグループではない近隣の民族にもかかわらず、サラ語に近い言語を話す人々が多く存在する。例えば、チャド東部に居住する民族ビララBilalaとシャリバギルミChari-Baguirmi州のバルマBarmaは、それぞれイスラーム化したカネムKanem王国とバギルミBaguirmi王国の中心民族であるが、その言語は同じサラ語族に属する。同様に、メドゴMedogoとケンガKengaは、イスラーム化が現在進行中のチャド中央部のゲラGuéra地方の民族⁸であるが、やはりサラ語族に分類される。その他の民族は、チャドの南部と中央アフリカ共和国の北部の境界をまたいで居住している(ガンバイ、ナールNar、サールSahr、グライGuray、ムバイMbay、ガマNgamaなど)。このような状況なので、便宜上サラ語族に一括りに分類されながらも、これらの民族は多様性を持っていることが明らかである。

彼らの独自のアイデンティティは自発的に発達したわけではない。自らを他と異なるものとして区別する意識するためには「他者」との出会いが必要であった。植民地時代以前のチャドにおいては、人々が自らのアイデンティティとして「民族」性を意識するきっかけはあまりなかったようである。たとえば、私の調査地の一つであるキアチ

⁷ マニャンは、「サラ」の区分を言語学的な意味で使用していると断っている。「サラ」は民族区分の実際を表しているのではなく、近い言語を利用する人びとの総称を示すとの解釈である。Magnant [1986 : p. 13]

⁸ ゲラ地方の民族を一般的にハジャライHajarayというが、民族名ではなく「山岳信仰を实践する人々」という意味である。イスラーム化が進む一方で、伝統的な山岳信仰も捨てておらず、北部のイスラーム教徒からは異端とみなされている。

⁴ Magrin 2001

⁵ Coudray 1992: pp. 176-177.

⁶ Ibid.

Kiati 村の住民は、フランス植民地政府から民族的にガンバイと区分されてきたが、同じガンバイであるはずのベノイ Benoye の人びとは、キアチの人びとを同胞として見るのではなく明らかに違うカテゴリーとして区別し「キアチの人たち」と呼んでいた。それは、キアチで話される「ガンバイ語」が著しくベノイのものと違うからだと言っている。

チャド人がエスニシティを自覚するようになる過程で、フランス人との接触の影響は無視できない。植民地政府は、チャドの住民たちを統制し支配しやすいよう、管理体制のもとで一定の秩序にしたがって分類しようと苦心した。しかし、彼らに人類学的な知識や地域住民を尊重する態度があったわけではない。そのため、こうした努力は「人種 (races)」の命名に関して多くの誤解を引き起こす結果となった。チャド人のインフォーマントとの意思の疎通のずれは、時に新しい民族名を作り出すことにもなった。例えば、マンドゥール Mandoul 地方で、植民地司令官がある農民に彼の出身民族の名前を尋ねたとき、その農民は（サラ語で）「マジンガイ Madji ngay（良い、はい、などの肯定的返事を表す）」と答えた。それ以来、マンドゥール地方のサラは「サラ・マジンガイ」と呼ばれている。チャド最大の民族グループであるガンバイの民族名に関しても、この名前が使われたのは 1920 年頃と比較的新しい。「誰もが（ガンバイという名は）『ngan mbay（名士の息子）』の変形なのか、それとも『ngan mbaydjé（小さなボス）』が語源なのかと頭を悩ませる」⁹。この混乱は、植民地政府が調査した際、中国語のような声調言語であるガンバイ語の特質を知らず、アルファベットのみで表記したことに起因するようである。

ともあれ、人の移動域の拡大に伴い他民族との接触が拡大したのは植民地期である。それによって異なった地域の住民同士が会合する機会が増え始めた。それ以前の時期に、自分の民族名などがきちんと認識され、日常語として定着していたかどうかは疑問である。出自の異なる住民同士が、自らの所属を説明しあう機会は植民地以前にはほと

んどなかったとマグランは考える¹⁰。彼によれば、それがたとえ白人によって与えられようとも、人々はあたらしい民族名を使って自己紹介をするようになった。そして、他民族グループとの接触の機会が増えるに従い、自分たちを規定する「民族」というくくりが日常の習慣に少しずつ溶け込み、名前が流通するようになっていったのではないかとみている。

2. 南部のアイデンティティ形成にかかわる要因

ここまで見てきたように、南部は、現実には多様なアイデンティティを持つ複数の民族の集合体である。それが、どのように単体として自らのアイデンティティを意識するようになったのだろうか。マグランは、この問題を理解する鍵として 3 つの歴史的視点を挙げている。第一に、植民地時代以前のイスラーム諸王国による黒人奴隷売買。次に、フランスによる植民地政策、そして第三に独立後の政治の不安定化である。これら 3 つの視点から、南部におけるアイデンティティ形成の過程を見ていこう。

2-1. イスラーム諸王国による黒人奴隷売買

ここでいう「奴隷制」は、ヨーロッパ列強が行った大西洋貿易におけるものではない。それよりも 800 年ほど前に始まった中東およびマグレブのイスラーム社会によって敢行されたブラック・アフリカの奴隷貿易のことである。南アフリカ生まれのロナルド・シーガル Ronard Seagal は、大西洋貿易に関わる欧米主導の奴隷貿易について研究を行っていたが、さらにイスラーム社会における奴隷制についても著書を著した¹¹。彼は、この二つの貿易の決定的な違いは、それぞれがかかわっていた経済システムにあるという。大西洋貿易の奴隷制がプランテーション栽培などの労働力として必要とされたのに対し、イスラーム社会における奴隷は、そうした生産ではなく、おもに妾、コック、荷担ぎ人、兵士などサービス分野に用いられ、富や権力の象徴として受け入れられた。イスラーム社会では、「そもそも奴隷自体が、生産の一要素

⁹ Magnant 1989 : p. 334.

¹⁰ Magrin 2001: p. 48.

¹¹ シーガル 2007。

というよりも、消費の一形態だったのである」¹²。

8世紀初頭までにイスラーム勢力は、サハラ砂漠の北を横断し西方を征服していった。そして8世紀末には、サハラ交易のためのキャラバンが定期的にサハラ砂漠を行き来するようになった。中東やマグレブのイスラーム諸王国は、このサハラ交易でブラック・アフリカの住民を奴隷として購入していたという。北方からのイスラーム勢力の進出の影響により、西および中央部の諸王国は次々とイスラーム化していった。現在のチャドの西に位置するカネム王国（9～14世紀）とそれに続くボルヌーBornou王国（14～19世紀後半）、中央部のバギルミ王国（17～19世紀）、東のワッダイOuaddai王国（17～20世紀初頭）¹³はいずれも中東・マグレブ、エジプト向けの奴隷を確保するために、南部地方で子供の略奪などを繰り返して富を築いたといわれている。これらブラック・イスラーム諸王国の支配階級も自ら千人単位で奴隷を所有していたとの記述も認められる¹⁴。

何世紀も前から、このような主従関係が、北部のイスラーム諸王国と南部の地域住民の間に存在していたことになる。しかしながらマグランは、奴隷売買の事実だけが、果たして南北の亀裂の原因なのかと問いかける。マグランは、むしろこの歴史的事実が、のちに北部の反政府組織であるチャド国家解放軍FROLINAT（Le Front de libération nationale du Tchad）¹⁵によってイデオロギー化され、南部出身のトンバルバイ政権に対抗するプロパガンダの道具として利用された側面を重視する¹⁶。FROLINATは、かつて自分たちの奴隷であった南部人に支配される恥辱を前面に押し出すことでイスラームの人々の賛同者を集め、自らの組織の母体としている。このように政治的扇動に使われた「主人（北）と奴隷（南）」の関係性のイメージの固定化が、現在の政治状況に重い影を落としておりとマグランは指摘する。

彼によれば、歴史的に見て、奴隷貿易以前は北の遊牧民と南の農耕民が直接接触する機会はある

ほどなかった。さらに、奴隷貿易は1880年代ごろで終焉を迎えている。だが、その後、バギルミ王国がワッダイ王国の圧力に屈し、南へと移動した政治的状況を背景にして、エキゾチックな物品（象牙、ダチョウの羽など）の商売の発達のおかげで北と南との交流が盛んになった。マグランによれば、この交流の活発化は植民地期以降に現れた兆候である。

2-2. フランス植民地政策の諸要因—政治、経済、教育

次に、フランスの植民地政策の影響についてであるが、マグランはフランスの植民地政策がチャド人の心底に南部と北部の対立感情を植えつけたと述べている。1900年にフランス軍はチャド領土において勝利を勝ち取ったが、領土全体を完全に平定するのに1930年代までかかっている。チャドは1920年まで、軍部が支配する軍事領であったが、それ以降は「自治植民地」となり、ブラザビルBrazzavilleに拠点を置くフランス領赤道アフリカ総督の直接管轄の下、副総督（le lieutenant-gouverneur）が治めていた。多くのアフリカ植民地の事例が示すように¹⁷、チャドの領土においても、植民地行政官のものの見方は、自国の経済的事情が最優先であり、地域固有の価値観や秩序はないがしろにされた。植民地統治の第一の目的である経済的な利益価値を見出すために、地域の現実を自分たちの都合にあわせて区分したのである。そのため、複雑な現実の多様性を無視して、使いやすい簡素化された解釈が創作された。具体的には、軍政から民政へと移行し、行政官が前面に出てくると、植民地政府は綿花栽培による収益を見込んで南部の領土を「使えるチャドTchad utile」と評価し、多くの経済投資を行った。このため、ほとんど経済的に魅力のない北部との経済的格差が広がった。北部は、サハラ砂漠に続く半乾燥地で、わずかな天水農業と伝統的牧畜が行なわれていたが、フランス本土にとっては何の経済的な利益も生み出さなかったのである。

北部のイスラーム社会は強力な中央集権システ

¹² Ibid: p. 3.

¹³ 各王国の年代については嶋田[2010]を参照。

¹⁴ 例えば、同上 p. 240。

¹⁵ FROLINATの結成とその後の展開については、坂井[2012]を参照。

¹⁶ Magrin 2001: p. 24.

¹⁷ 例えば、嶋田[1992]によれば、イギリス人の自国に都合のよい対ナイジェリア観が統治政策に大きな影響を及ぼしている。

ムを保持していた。彼らは、イスラームの精神的・物理的基盤がフランスの統治によって破壊されることを非常に恐れ、植民地権力に強く反発する傾向を示した。植民地政府に対する北部のイスラーム教徒たちの反抗は、フランスが試みる領土の組織化を困難なものにしていた。フランスにとって北部の領土は、経済的利益は見込めなかったものの、仏領赤道アフリカおよび西アフリカの領土を統治する上で、地理的・軍事的に非常に重要な拠点であり、なんとしてもコントロール下に置かなければならなかった。実際、バルダイ・エネディ・チベスティ Bardai-Ennedi-Tibesti (BET) の地方は、独立以後も 1970 年代までフランス軍の支配下に置かれていた。また現在もチャドには、軍事協定のもと、アフリカ大陸全体に対する安全保障の拠点として、フランス軍のベースキャンプが置かれている。

フランスは、北部のイスラーム社会に対して相反する感情を持っていた。一神教を基盤とするイスラーム社会の中央集権的社会システムにおける高潔さと秩序の正しさや高度な文化の存在は、フランス人にある種の共感と畏敬の念を呼びおこした。だがその一方で、敵に相対した時の彼らの結束の強さは並々ならぬものがあつた。イスラーム教徒たちのフランスに対する反抗的態度はさらに凶暴になりつつあり、フランスはそれを恐れ警戒してもいた。

他方、フランスはある種の軽蔑感を持って南部を見ていた。なぜなら、南部の村社会は無頭社会と呼ばれるシステムで、イスラームの中央集権的社会に比べ組織化が未発達だとフランス人の目に映ったからである。無頭社会では、突出した力を持った権力者はおらず、複数の長老が自然信仰に基づいた複数の役割をそれぞれ分担し、緩やかなコミュニティを形成している。あらゆる決定事項は長老たちの合議制である¹⁸。フランスは、支配者を確定できない社会システムを持つ社会を未開社会であると決めつけ、綿花の強制栽培の導入による一方的な富の吸い上げを中心に政策を決定した。

その一方で、植民地支配者たちは体力的に屈強な南部のサラ・ガンバイ人を「*belle race*（美しい

種族)」とよび、優れた労働力として高く評価した。このため、彼らはコンゴ・オーシャン Congo Océan 鉄道建設 (1921-34)¹⁹ のための作業員を、特にサラ・ガンバイ人から確保するようになった。1924 年から 1934 年の 10 年間に、フランス植民地政府に取り立てられコンゴに送られたモヤン・シャリ Moyen-Chari 州出身のサラ人の労働者の総人口は 120 000 人を越える。そして、過酷な労働条件のため、その大多数が帰省することなくコンゴで亡くなっている²⁰。この甚大な損失は、当然のことながら地元の人口比率に負のインパクトを与え、その結果、深刻な農業生産の低下を引き起こした。

フランスは南部開発のために、人材と資金の大規模な投入を行なった。その結果、チャドのほとんど唯一の外貨獲得手段である綿花生産は増加した。他方、北部では、ほとんど地域の社会経済的な開発のための投資はしていない。この違いは、後に根本的な経済格差を生み出すこととなった。しかし 1970 年代までは、北部の農民に比べ、南部農民の農業収入がとりわけ豊かだったわけではない。なぜなら、綿花が長年低価格に抑えられていたからである。実際に綿花価格が上昇し始めたのは 1990 年代に入ってからである。また近年では、2000 年よりロゴン・オリエンタル Logone Oriental 州 Doba 地方における石油開発が始まったことで、南北の経済格差はさらに拡大している。

さらに、植民地政府の教育政策も、南北格差に多大な影響を与えた重大な要因として指摘できる。フランス式教育政策に対する人びとの反応は、地域によって大きく異なつた。北のイスラーム教徒は、完全拒否の姿勢をあらゆるところで見せつけた。特に東部のワッダイ州では、親たちはフランスの教育制度に対して敵意をあらわにした。子どもたちがイスラーム教に対して不誠実 (チャド・アラビア語で *kuffar*/sg. *Kaffir*) になり、イスラームに基礎を置く彼らのアイデンティティを失うことを恐れたのである。

こうした人々の反対運動は、文化的融合を押しつけるフランスの高圧的な政治に対する確固とした意思表示であつた。かつてイスラーム帝国のあつたワッダイ出身のカヤール Khayar は、この現象

¹⁸ Magnant 1985: pp. 26-27.

¹⁹ Azedevo 1981.

²⁰ Ibid.: p. 12.

に対する明晰な分析を行なっている²¹。

イスラーム圏の抵抗にもかかわらず、最初の公立学校は北部に建設された。行政面での必要性から、1921年、植民地政府は最初に首都フォールラミー Fort-Lamy（現ンジャメナ N'Djaména）に公立学校を1校建て、次にワッダイ州アベシェ Abéché に1校開校している。南部に関しては、北部から6年遅れて1927年にフォールアルシャンボー Fort-Archambault（現サール Sarh）、1931年にムンドゥ Moundou に1校ずつ開校した。

イスラーム教徒たちの憎悪に満ちた態度とは反対に、南部の人びとは、植民地政策やキリスト教などのフランスの介入に対してそれほど厳しい態度を見せはしなかった。最初にいくらかの困難はあったものの²²、南部人たちはカトリック教会とフランス語による教育の介入を最終的に受け入れた²³。その結果、児童就学率および識字において、北部と南部との間に大きな格差が生まれた。現在に至ってその格差拡大が重大な状況を引き起こしている。1960年の独立前にはフランス語の習得者のほとんどが南部出身者で、したがって組閣のための人事をおこなうにあたり、チャド政府の閣僚メンバーのほとんどが南部出身者で占められる事態となった。

実際のところ、高級公務員と教員のポストのほとんどは南部出身者で埋め尽くされている。例えば、1975年にはチャドの教育階梯の最高峰に位置する国立行政学院 ENA（Ecole nationale d'administration）の学位取得者268名のうち、79.5%が南部の出身であった²⁴。イスラーム教徒のエリート層は、エジプト、スーダン、サウジアラビアなどのイスラーム諸国で高等教育を受けている。だが、彼らの学位は当時、唯一の公用語を

フランス語としていたチャドでは正式に承認されなかった。チャド・アラビア語が2つ目の公用語として認められるのは1982年、北部BET出身のトゥブ Toubou 人ヒッセン・ハブレ Hissen Habré がクーデターにより政権を掌握してからである。

北部イスラーム教徒たちは、フランス語ができないことで社会進出の機会を奪われていると感じていた²⁵。こうした社会的閉塞感は、明らかに「南部」政権に反抗する反政府勢力 FROLINAT の結成を後押ししたと考えられる。学校を卒業し学位を取得することは、上位の責任あるポストにつき、社会的に成功するためのパスポートである。この学位に対するある種の「渴望」は、イスラーム教徒たちをして、なんとしてでも学校での遅れを取り返すように駆り立てた。そのために、彼らは、汚職、暴力、不正行為も含めたあらゆる手段を駆使するようになる²⁶。

2-3. 独立と内戦

南部の民族的な自覚は、1960年の独立とそれに続く政治的カオスの中でさらに強化されていった。今日に至るまで、3つの歴史的出来事がこの状況に拍車をかけた。はじめに、初代大統領フランソワ・トンバルバイ François Tombalbaye による独裁、イスラームを旗印とした反政府勢力 FROLINAT の誕生、そしてそれに続く北部同士の断続的な内戦の繰り返しである。この暴力に満ちた一連の出来事は、決して民族間の力関係や、それぞれの政治指導者の個人的な性格だけでは説明しつくすことはできない。

南部モヤン・シャリ州出身のトンバルバイが、独立後共和国の初代大統領の座に着いた。多くのイスラーム教徒にとって、新しい「南部人」ボスの誕生は、社会秩序の逆転であった。マグランは、チャド人のイスラーム教徒であるラマナ Lamana と、ヨーロッパ人クドライの二つの異なった視点を参照しながら、チャドのイスラーム教徒たちも、

²¹ Khayar 1976.

²² 綿花の強制栽培に関しては、導入当初は大きな抵抗があり、農民の輪作サイクルに取り入れられるまでに時間がかかった。

²³ 最初のカトリック教会の建設に関しては Hallaire [1998]を参照のこと。

²⁴ 男女比率に関しては、全員が男子学生であった。今日に至るまで、就学率における男女の大きな格差があることを確認する必要がある。女子を学校に送ることに対する強い抵抗感がいまだ存在している。例えば、10年前にはロゴン・オリエンタル州では、男子の就学率は83.7%であるが、女子は47.07%に留まっていた。Arditi 2003b: pp. 11-12.

²⁵ 独立後のヨーロッパ型近代国家建設を見据えたとき、旧宗主国の言語および教育体系の習得は不可欠のものであったが、チャドに限らず、イスラーム的価値観とフランス式公教育とのはざまに苦悩した人々が多い。たとえばマリ・ニジェール・アルジェリアにまたがる遊牧民トゥアレグの事例など参照。Mohamed Ali Ataher Insar 1990.

²⁶ Arditi 2003a 参照。

ヨーロッパ人の一部もこうした見方を共有していることを指摘している。ラマナは「奴隷と見なされていた者たちが、突然、昨日の主人の支配者になった。」と当時の衝撃を記している²⁷。

また、クドライは、トンバルバイによる政権の掌握はイスラーム教徒たちに憎悪の感情を起こせたと指摘する。「このような力関係の転覆は、少し前までの被抑圧者にかつての主人に対する支配権をあたえたが、すぐさま彼らの反乱を呼びおこすことになるだろう」とのちの混乱を予想している²⁸。マグランは「しかしながら、もしこの考えが1990年代に代表的なものだとすれば、現代のチャドにおける地政学上の問題に対して奴隷売買が与えた影響を、あまりに単純化している」と主張する²⁹。「南部の奴隷が北部の主人の上に立った」ことに対する憎悪という単純なシナリオだけでは説明しきれない、トンバルバイ大統領個人の政治運営能力の欠如という根本的問題がなおざりにされているからである。

トンバルバイ時代の政治を概観すると、この大統領の異常なまでに権力に執着する実態が明らかになる。独立から2年後の1962年には全野党を禁止し、チャド進歩党PPT (Parti progressiste tchadien) の事実上の一党体制へと権力集中化を図った。さらに1970年代に入ってから、かねてから傾倒していたザイル (現コンゴ民主共和国) のモブツ Mobutu 大統領の政策を模して、「真正政策 (Politique de l'authenticité)」を採用した³⁰。この政策は、人名・地名のアフリカ化を含む文化革命である。大統領自身のファースト・ネームを、フランソワからンガルタ Ngarta に変更したほか、首都名もフォールラミーから現在のンジャメナに変更した。その後、政策はさらにエスカレートし、南部地域特有の伝統的成人儀礼ヨンド Yondo を北部イスラーム系住民にも強制するなど常軌を逸した行動をとるようになった。こうした状況に対して、各方面で大きな不満が蓄積されていったことは想像に難くない。

だがトンバルバイの政敵は、必ずしもイスラーム教徒に限られていたわけではなく、南部出身の政

治家の中にも数多くいた。トンバルバイは、彼らがクーデターで権力を奪取するのではないかという強迫観念に常に悩まされ、その結果、政敵を次から次へと暗殺するという行為に至る。サラ・マジンガイの民族出身であるトンバルバイは、同じ南部のムバイとガンバイに対して、特にただならぬ対抗意識を持っていたことも明らかになっている³¹。

トンバルバイと同じチャド進歩党PPTの幹事長だったガブリエル・リゼット Gabriel Lisette は、カリブ海アンティュー諸島出身で、当時ムンドウ³²選出の代議士であったが、突然にトンバルバイによって更迭される。リゼットは当時ガンバイの間で絶大な人気を誇っていた。人びとはトンバルバイの決定を不当だとして、激しく抗議したが受け入れられなかった。マニャンは、このリゼット更迭の例を引きながら、トンバルバイの単一政党による独裁が民族のアイデンティティの覚醒に貢献した点を指摘する³³。この事件をきっかけに初めてガンバイ人たちは、政治空間における自らの民族のアイデンティティをサラ人と区別して自覚したといえる。

リゼットに続き、多くのかつての仲間が政治的さらには肉体的にも抹殺されていった。モイサラ Moïssala 州出身のトゥラ・ガバ Toura Gaba、チャド進歩党PPTのメンバーであったアハメッド・コトコ Ahmed Kotoko、アフリカ社会主義者運動MSA (Mouvement socialiste africain) のアハメッド・クラマラ Ahmed Koulamalla、チャド独立農村グループGIRT (Groupe des Indépendants et Ruraux du Tchad) メンバーのジブリン・ケララ Djibrine Kherallah などである³⁴。このような状況に直面し、イスラーム教徒であれ、「サラ以外の」南部人であれ、人びとが「南北の違い」を超えてトンバルバイの独裁政権に対する不満を共有することはできなかったのだろうか。

³¹ 独立前夜におけるトンバルバイの政権獲得のための戦いは、FROLINAT の元兵士であった Djarma [2003] の著作に明らかにされている。この著作は、初めて FROLINAT の内部から内戦の経験を語った貴重な史料である。

³² 首都ンジャメナに次ぐ第二の都市。ガンバイ人が多く居住するが、北部のイスラーム教徒の移住が年々増えている。

³³ Magnant 1989: p. 334; Koji-Yorongar 1996: pp. 99-102.

³⁴ Djarma 2003: pp. 11-24; Yacoub 1990: pp. 93-98.

²⁷ Lamana 1996: p. 25.

²⁸ Coudray 1992: p. 185.

²⁹ Magrin 2001: pp. 24-25.

³⁰ 小田 1986: p. 217.

ここで確認すべきは、イスラーム教徒にとっての敵は「南部人」=Kirdi（チャド・アラビア語で「異教徒」の意）という宗教を軸に築かれたものであり、民族の違いではなかったということだ。イスラーム教徒にとって「サラ」は、「南部」全体の象徴であり、憎しみの対象であった。だが、ガンバイの人々の意識では、「サラ」はサール周辺に住む「サラ・マジンガイ」を意味し、その中に自分たちは含まれていない。また、カメルーン国境のマヨケビMayo-Kebbi州・タンジレTanjilé州の人々にとって「サラ」は、ロゴン・オリエンタル、オキシデンタルの両州とモヤン・シャリ州の住民すべてを指しているが、自分たちはそこに含まれていない³⁵。「サラ以外」の南部人たちが「反トンバルバイ」を旗印に共闘を画策することは可能だったかもしれない。だが、宗教によって相手を規定するイスラーム教徒と手を結ぶことは不可能だったのである。

2-4. 反政府軍 FROLINAT の登場

1966年、チャド国家解放軍 FROLINAT が、スーダンの支援を受けたイブラヒム・アバチャ Ibrahim Abatcha によって結成された。その前年1965年に、ゲラ地方マンガルメ Mangalmé で勃発した農民たちの抵抗運動から生まれたこの反政府グループは、トンバルバイ時代以降の政治の舞台において、決定的な役割を担った。

結成当時、リビアの軍事支援を受けた FROLINAT の兵力は約 1000 程度であったという。その時の中央政府が擁していた兵力は、陸軍が約 700 名、空軍が 200 名、合わせて 900 に過ぎなかった。FROLINAT の軍事力は、リビアの支援によってさらに増大する傾向を見せ、政府軍にとって重大な脅威となる。このため、フランス軍はチャド支援のために約 1600 の兵力を派遣している (1967 - 71)³⁶。

FROLINAT は、「南部人による政権」に対する反乱を目的としている。「イスラーム」の概念もまた、FROLINAT への帰属意識の表象としての一つの要因を構成する。実際、成員全員がイスラーム教徒であり、チャドのイスラーム化された地域の出身

者である。この点について、元 FROLINAT の戦闘員であったジャルマ Djarma は、イスラームのアイデンティティが、軍への愛着に大きな役割を果たしたことを示している³⁷。

しかしながら、FROLINAT に詳しいライデン大学の政治学者バイテンハイス Buijtenhuijs の分析によれば³⁸、イスラームの概念そのものは、決して FROLINAT の革命的イデオロギーの下にイスラーム教徒を集結させる理論的支柱にはなり得えず、信徒の気をひくための単なる旗に過ぎなかった。結果として、指導者たちは、知識レベルで彼らの行動を革命に結晶させるような一つのイデオロギーとしてイスラームを概念化することはできず、また政権獲得の後、国家の取るべき方向性を定める政治的ヴィジョンも確立することはできなかったという。

チャド国内および海外の何人かの観察者の期待に反し³⁹、FROLINAT は、以上のような理由から、決してその組織内に革命の求心力を作り出すことが出来なかった。付け加えれば、FROLINAT はチャドのすべてのイスラーム教徒から支持されていたわけではない。カネム州、ラック Lac 州、シャリ・バギルミ州など、いくつかの州の住民たちは、多かれ少なかれ FROLINAT から距離を置いていた⁴⁰。結局のところ、FROLINAT の運動は、農民一揆の延長に過ぎず、エリート層や宗教指導者層を巻き込むことに一度も成功しなかったのである。このため、それぞれの地域色と民族主義に彩られた多くの派閥 *tendances* は内部闘争を繰り返し FROLINAT の内部分裂を引き起こした⁴¹。この対

³⁷ 「17 時半に、BSI のボランティアだった M. アネットは、質問をしにやってきた。彼は私に、なぜ逮捕されたのかしっているか? と聞いた。私は、いいえ、と答えた。すると、彼は『お前は FROLINAT と接触があるのか?』と続けた。私は、はい、と答えた。『北部人として、またイスラーム教徒として、FROLINAT と接触がないなんて、私にとっては裏切り行為です』。Djarma 2003: p. 54.

³⁸ Buijtenhuijs 1990: pp. 127-137.

³⁹ 結成当初は「アフリカ初の社会主義革命」との期待の入り混じった評価を下す研究者もいたという [Ibid.]。バイテンハイス自身も 1978 年の著作での FROLINAT に対する評価について、過度な期待を抱いていたと告白し修正している [Buijtenhuijs 1987]。

⁴⁰ Ibid. : p. 127.

⁴¹ グクーニ Goukouni がフランス国営ラジオ RFI (Radio France International) とのインタビューで詳細を語っている。Correau 2008。

³⁵ Magnant 1989: p. 334.

³⁶ 小田 1986: p. 215.

立の裏に、リビアを先頭として、スーダン、ナイジェリア、中央アフリカなど近隣諸国の介入があったことを忘れてはならない。各国は、チャドの領地における影響力を拡大するため、「それぞれの派閥を支援する」との大義名分の下に内戦に介入した⁴²。

結局のところ、FROLINAT は「北部イスラーム」対「南部」という対立軸を立てたものの、イスラームのアイデンティティを利用し求心力を強化することに失敗した。そして、この戦いを「南北地域間対立」の枠組みに収めることができずに、自らが内部崩壊することとなったのである。

1975年に、トンバルバイが南部サラの兵士に暗殺された後、同じく南部のムバイ人・フェリックス・マルム Felix Maroum 将軍が大統領に就任し、FROLINAT 側から、北部ファヤ地方のトゥブ人であるヒッセン・ハブレが首相となった。

しかし、この2人の指導者は共有すべき政治的理念は全くなく、数ヶ月の後、彼らの内閣は崩壊する⁴³。その一方で、FROLINATの内部では早くも分裂が始まっていた。北部の各地域に複数の武力勢力が並び立ち、1979年まで長い政治的混乱が続くこととなる。

さまざまな勢力が跋扈する FROLINAT の中で、北部軍事司令評議会 CCFAN (Conseil de commandement des forces armées du Nord) を結成し共闘していたグクーニ・ウェダイ Goukouni Weddeye (北部ゴラン Gourane 人) とヒッセン・ハブレは、臨時連合政府 GUNT (Gouvernement d'Union Nationale de Transition) を作り国家運営を行おうとした。だがグクーニは大統領職を務めたものの、実際には国家再建のための具体的計画を一切実現できなかった。

1976年8月に、さまざまな問題から両者は決裂する⁴⁴。グクーニ率いる人民軍FAP (Front Armée

Populaire) とハブレの北部軍隊FAN (Forces Armées du Nord) が武力対立し、内戦へと突入していった。

1979年2月に起こった戦闘で、南北の分断は決定的なものになった。ハブレの北部軍隊FANは、最初に東部のスーダン国境に近いアベシェ、次に首都ンジャメナに攻撃を仕掛け、FANはこの2つの中心都市を支配下におさめることに成功した。その結果、臨時連合政府はもはや名前だけの内閣となった。この混乱の最中に、先ずは東部のアベシェで、次に首都ンジャメナで、民族的・宗教的な理由による大規模な虐殺が次々と起こった。南部出身の住民たちがその標的にされた。そのため、兵士たちに攻撃を仕掛けられた多数の南部出身の公務員などが、南部の出身地へ大規模な避難を行った。この大逃避行を組織したのがカモゲ Kamouké 大佐である。2月末から3月初旬にかけて、70,000人から80,000人があわただしく首都を後にしたという⁴⁵。

実際のところ、ハブレ自身は決して熱心にイスラーム教を信心していたわけではなく、むしろ無宗教的、実利的な論理の持ち主であった⁴⁶。FROLINAT内部において少数民族出身の弱い立場から、ハブレは民族的・宗教的なカードを利用し、南北対立を演出することで、組織内の地盤の強化を図ったと言える⁴⁷。南部のモヤン・シャリ州とロゴン・オリエンタル州およびロゴン・オキシデンタル Logone Occidental 州では、イスラーム教徒に対する多くの報復が行なわれた。だが南部のモヤン・シャリ州の州都サル Sarh における紛争は、サラとサラ以外など南部人同士によるものであったという⁴⁸。こうした殺戮は、関係するアクターすべてにとって複雑かつデリケートな問題である。事の真偽を含め様々な意見が噴出する論争の場となった。そして、さらに政治的混乱の中で、殺戮・虐殺の報復行動が単純化・ドラマ化されていった

⁴² Buitenhuijs 1979, 1987 を参照。

⁴³ Djarma 2003: p. 152.

⁴⁴ 一つには、FROLINAT が誘拐したフランス人考古学者 クラストル Claustre 夫妻への対応、二つ目には北部アオズ Aouzu 地域を占拠するリビアへの対応で両者の意見が分かれた。ハブレは身代金を手に入れるまでクラストル夫妻を人質として確保しておく方針だったが、グクーニはリビアの仲介で早期に解決することを望んだ。ハブレがリビアに対して徹底抗戦の姿勢を貫こうとしたのに対し、グクーニは対話による領土解決をめざそうとした。[Buijtenhuijs 1987: p. 32]

⁴⁵ Lanne 1981: p. 77; Magrin 2001: p. 33.

⁴⁶ 例えば Lanne 1980: p. 78.

⁴⁷ Magrin 2001: p. 33.

⁴⁸ モヤン・シャリ州では約 500、両ロゴン地方では 600 名の犠牲者が生じた。しかし実際に戦闘に加担したのは、カモゲ大佐の支持者であり、南部の地域住民と地域の権力者はほとんど加担していなかった。唯一の例外としてサルでは、南部人のサラとサラ以外の民族が衝突し地域住民を巻き込んだ大きな戦闘になったという。Ibid.

可能性をバイテンハイスは指摘している⁴⁹。

南部人たちの大移動を組織した南部のカモゲ大佐は、ンジャメナの中央政府と距離を保ちつつ、緩やかな自治権を持つ常設委員会 (le Comité Permanent) をムンドゥに設立した。1982 年まで、この組織は南部地方において国家に代わる役割を果たした。ランヌによれば、臨時連合政府 GUNT との関係を維持しながら、常設委員会は、南部 5 州 (タンジレ Tanjilé、マヨケビ Mayo-Kebbi、ロゴン・オキシデンタル、ロゴン・オリエンタル、モヤン・シャリ)、さらに中央アフリカ北部における自治権獲得に成功している。

「ラゴスでの会議の後、南部⁵⁰は臨時連合政府 GUNT に参加しつつ、国政に再び加わることとなった (1979 年 11 月 10 日)。24 議席のうち 11 議席を獲得、そのうち副大統領職を、常設委員会委員長であるカモゲ大佐が担うこととなった。つまり、(南北の) 分離ではなく、分割行政であった」⁵¹。

常設委員会は次の二つの原則を特徴とする。まず一つには、地域色・宗教色を前面に出しすぎる FROLINAT に押し付けられた「革命」には譲歩しない、ということ。そして二つ目は、国が分裂しても南部 5 州を堅持し、将来的にはこの組織を基点として政教分離を堅持する民主的な国家を再建する、という将来的ヴィジョンである。

北部から切り離された当初、南部の平和は維持され委員会は生き延びた。その背景には、南部の綿花の集荷・加工を一手に引き受ける国営企業コットンチャドが操業を続け、地域の経済的安定に重要な役割を果たしたことがある⁵²。

しかしながら、初期には一致団結して始動したにもかかわらず、カモゲ大佐の高圧的な態度に対し、徐々に委員会メンバーがカモゲと対立する様相を見せ始め、禁止されていた複数の政党が内部で結成されるようになった。このような委員会のメンバー間の対立、さらには財政管理能力の欠如

などから、委員会は分裂を始める。

長い混乱ののち、1982 年 1 月にタンジレ州ライ Lai で開催された理事会は、委員会の解散を決議する。しかし、カモゲ大佐は投票を拒否、一人で委員会を存続させた。カモゲ大佐は自らの基盤である南部においてこのように孤立したために、ンジャメナの臨時連合政府との停戦協定を結ぶに至った。カモゲ大佐は、ライバルたちから抗議を受けたが、そのうちの何人かはむしろ FROLINAT の枠を超える国家の再建を夢見てハブレの北部軍隊 FAN との妥協に積極的であった。だが 1982 年 9 月、FAN は突然兵を送り、戦うことなく南部の制圧に成功する。この予想外の占領は、北部の兵士たちに暴力と略奪の場を日常的に提供した。

故郷への集団避難、委員会の結成と挫折という大きな経験をへて、南部のアイデンティティは、内部対立を抱えながらも対外的に強固になっていった。政治的には、連邦国家、さらに言えば分離独立という漠然とした考えが、少しずつ人びとの心に芽生え始めた。しかし当時の状況では、そうした考えはあまりに非現実的であり、この試みは失敗に帰する。なぜなら、南部委員会の指導者たちは、中央アフリカの北部との協定を取り付けることが出来なかったからである⁵³。ランヌはこの状況に対し、次のようなコメントを残している。

実際、連邦制や地方分権の言葉が出てきたとき、この疑い (分離独立) が明らかになった。だが、制度面でのこうした話はそれほど進まなかった。なぜなら (対処しなければならない) 現実には直面する数々の問題が、公法の素晴らしい原則よりも上位に立っていたからだ。二つの構成要素による連邦制は生育力がない、あるいは分離独立の一步手前でしかないのだと判断するところまで、議論を進めるべきであった⁵⁴。

連邦制や分離独立実現の可能性は、人々が具体的に議論を深め熟成させる前に、困難な現実には直面し雲散霧消したといえる。

1982 年 6 月、FAN は大統領となるヒッセン・ハ

⁴⁹ Buijtenhuijs 1987: pp. 70-73.

⁵⁰ ここで「南部」とは、南部 5 州と現中央アフリカ北部で構成される常設委員会のことを指す。

⁵¹ Lanne 1984: p. 30.

⁵² Ibid. : p. 32.

⁵³ Magnant 1989: pp. 335-336.

⁵⁴ Lanne 1984: p. 44.

ブレに率いられ、勝ち誇ってンジャメナ入りを果たした。その後、カモゲ大佐はカメルーンに亡命する。南部では「コド」⁵⁵と呼ばれる多くの反政府分子が組織された。このゲリラたちは、南部出身の兵士たちの一部で、地域ごとに異なったグループを結成していた⁵⁶。

ハブレは権力を手中に収めたものの、政府は、FROLINATからそのまま引き継いだ複数の派閥の脅威と不安から、決して解放されることはなかった。彼は、チャドを一つの国としてまとめることに苦心した。派閥間の調停のために数々の交渉が行なわれた。ハブレは最終的に、1989年12月、憲法発布に関する国民投票を行い、大統領選挙で99.4%の「支持」を獲得する。この選挙で、ハブレが唯一の候補者であった。事実が示すように、ハブレは力で反対勢力を押さえつける一党独裁システムに力を借りた⁵⁷。ハブレの独裁に対し、1990年、救済愛国運動MPS（Mouvement Patriotique du Salut）がイドリス・デビーによって結成された。彼は、スーダンの後見に助けられ、同年12月にクーデターを成功させ、軍隊により首都を支配下に置いた⁵⁸。

3. 現在の政治状況にみるデビー政権の脆弱性

クーデターに成功したイドリス・デビーは3年間の移行期間を経て、1993年にようやく「主権国民会議 CNS（Conférence Nationale Souveraine）」を開催した。このことによって、新しいチャド政府はいわゆる“民主化”の手続きを一步進めることとなった。複数政党制の導入、言論の自由、自由選挙の実施……あらゆる約束は、民主国家への道へと扉を開くはずであったが、それらは偽りの単なる儀式に過ぎなかった。結局のところ、デビーの政権もまた、自らのライバルであったヒッセ

ン・ハブレの独裁的な性質をそのまま受けついでおり、根本的にはハブレが敷いた専制的構造のルールに頼っていたのである。

現在、デビー大統領は、歴代のチャド大統領が背負っていたと同じ苦難に直面している。東部には複数の反政府分子が、スーダン政府の支援を受けて勢力を拡大増殖している。主要なグループの一つで、デビー大統領と同じ民族ザカワ⁵⁹出身者による反政府勢力は、同じザカワが深く関係する隣国スーダンにおけるダルフル紛争をきっかけに、デビー大統領に反旗を翻した。少数民族のザカワは、かつてはデビーの権力の下につどう強固な家族であった。だが、このような内部からの反逆は、デビー政権の弱体化が進行していることを露呈させた。さらに、アラブの春でこれまでデビー政権を支えてきたカダフィのリビアが崩壊したことも加わり、デビー政権は徐々に求心力を失いつつある。

実際のところ、デビー政権は、かつて一度も国民の大多数に支持されたわけではなく、権力にぶら下がっている一握りの親族集団に支えられているにすぎない。デビー政権は自らの権力を強化するため、リビアなどの後押しで国家のイスラーム化を推進してきた⁶⁰。イスラーム教徒たちはそこに自らのアイデンティティを確認し、南部のアイデンティティとの対立を際立たせるようになった。南北対立を道具として使ったこの戦略は、イスラーム内部の結束を強化するために、常に暴力的な敵意をあおった。不満を抱えた人々の視線は、経済・社会の不安定化から意識的にそらされ、イデオロギ的に作られた「敵」へと向うように仕向けられている。

独立からこれまで、登場したチャドのすべての政権は、それが南部人であろうと北部人であろうと、政治的安定を維持するために独裁体制を共有

⁵⁵ Commandos（ポルトガル語でゲリラ隊）の略称。

⁵⁶ 「主要な“コド”のグループは、当時モヤン・シャリ州のコド・ルージュ、ロゴンのコド・ヴェール、マヨケビ州のコド・ココやし、そして後にロゴンとタンジレのココ・ロゴタンとロゴン・オキシデンタル州のコド・エスポワールが加わった」。Buijtenhuijs 1987: p. 293。

⁵⁷ 1982年に結成された独立と革命のための連合 UNIR（L'Union Nationale pour l'Indépendance et la Révolution）が唯一の政党であった。

⁵⁸ ハブレはこのクーデターを受けセネガルに亡命し現在に至る。彼が大統領時代に行った虐殺の被害者遺族が会を結成し、ハーグの国際司法裁判所に告訴している。

⁵⁹ 反政府組織「変化のための礎、国家の連帯と民主主義」SCUD（le Socle pour le Changement, l'Unité nationale et la démocratie）は、1990年代の終わりに、デビー大統領の甥に当たる双子トムとチマン・エルディミによって結成された。

⁶⁰ 1998年、リビアのカダフィ大佐は、かつてのサハラ交易を象徴して大キャラバンを組織し、陸路でチャドを訪問した。チャド政府は、この機会にサブサハラアフリカ諸国の首脳を招き、国家行事としてンジャメナのモスクでイスラームの祈りの会を催した。このことに対し、多くの非イスラーム住民が反発した。

していた。その中で、暴力は常に反対勢力を押さえつけるためのツールとして重要な役割を果たしている。あらゆるレベルでの紛争や争いが日常の文脈の中で習慣化されることは、政府にとっては自らの暴力の正当化のために、そして人びとの暴力に対する感覚の麻痺のために必要なことであった。

4. 創られた境界線

4-1. 日常風景にみる南北対立

これまで見てきたように、チャドの内戦は、実際には必ずしも南北の地域間対立ではない。むしろ、複数のばらばらな対立分子が、地理的・民族的・宗教的対立軸を利用して政治の掌握を試みながらも、失敗を繰り返してきた歴史だといえる。それにもかかわらず、チャドの日常には「南」と「北」の区別がある。先にみたイスラーム諸王国の黒人奴隷売買の歴史的記憶は、いまだ人々の心の奥底に眠っているが、それを揺さぶり目覚めさせる政治的圧力が働いている。北部の遊牧を中心とするイスラーム社会と南部の非イスラーム社会（キリスト教・自然信仰）というプロトタイプの構図は、隣国のスーダンと 2011 年に分離独立を果たした南スーダンとの関係、あるいはモーリタニアの白モール人と黒人との関係にもみることができるかもしれない。

その緊張を帯びた境界線は、必ずしも地理的意味だけに規定されるわけではない。特定のエスニック集団、宗教、居住する地域などへの帰属意識、すなわち地域住民のアイデンティティと密接に関わっている。たとえ外国人であろうとチャドに数日滞在するだけで、首都ンジャメナの道端での会話や、新聞の論調に「北」と「南」の間に存在するある種の緊張した溝を誰もが感じざるをえない。このような緊張関係は、直接的な暴力の場合もあれば、非常にネガティブな言葉を浴びせかけるなど様々な形をとる場合もあるが、学校や市場、道端など、日常的な場面における人間同士の暴力的なぶつかり合いに現れている⁶¹。この対立は、経済、政治、社会の閉塞に苦しむチャドのさまざまな問題の根底に横たわっているといえよう。

チャドでよく使われる「北部人 (nordiste)」、「南

部人 (sudiste)」という表現は、長い間チャド人自身が使うことを躊躇していた⁶²。1980 年代までは、この多民族社会において、民族や文化を超えたつながりに対する価値を低めるニュアンスを含むと考えられていたからである。しかし 1990 年代に入ると、こうした二極化した表現が頻繁に使われ始めるようになる。クドライは、その背景には「前回の (イドリス・デビーの) クーデターによる政治環境の破壊、それ以前の二代にわたる専制政治による大きな失望の蓄積の表象⁶³」があると指摘している。

南部の都市ムンドゥの主要民族はサラ・グループに属するガンバイ人である。この町に調査のため滞在していたとき、道端で激しい殴り合いのけんかに行き合った。見物人の話によると、あるイスラーム商人が通りがかりのガンバイ人の男性を「奴隷の息子 (チャド・アラビア語で *abid*)」と呼び、それが相手の怒りを買ったのだという。この現代において、「奴隷」という時代があった言葉で他人を罵倒することが日常におこなわれることに驚いた。

だが、こうした例はいたるところで見受けられる。首都ンジャメナにおいては、北部出身と南部出身の高校生の間で、暴力的な対立が日常化しており、時には生徒間の喧嘩が死に至る場合もある。高校の壁には、「武器を校内に持ち込まないこと！」というポスターが大きく張り出され、日常の風景に定着している。

このような例は他にもあげることができる⁶⁴。2001 年、ある南部出身の高校生が、北部出身の女子学生と交際していたことを理由に殴られ死亡した。犯行に及んだのは、女子学生の兄で、市長の前妻の息子でもあった。本人の弁によれば、自分の妹がキルディ *kirdi* (異教徒) と交際するのが我慢ならなかったという。

また、ンジャメナのある高校では、南部出身の教師が、北部 BET 出身の学生たちと付き添いの保護者たちに「罰」のため撲殺された。「この教師が経済地理の授業中、統計を援用しつつ、砂漠のオ

⁶² 「北部人」「南部人」の区別は政治的圧力によって作られたとの意味合いを強調するために、本稿では「」をつけて表記している。

⁶³ Coudray 1992: p. 179.

⁶⁴ Arditi 2003a: pp. 64-65.

⁶¹ Arditi 2003a: pp. 51-67 の詳しい研究を参照のこと。

アシスに在住するカマジャ（カマヤ）
Kamaja/Kamaya という民族は、奴隷の子孫であると教えたことが発端であった。」という。

農村部では、早魃の影響で南下するイスラーム系遊牧民と定住農耕民の衝突が頻繁に起こり、時には悲惨な殺し合いにまで発展するケースも見られる。2004年の筆者の調査滞在中、南部の村マイボゴ Maibogoにおいて陰惨な殺戮事件が発生した。2004年3月29-31日のンジャメナの新聞ンジャメナ・ビ・エブドによれば、「ハワネHawasné・アラブの遊牧民は、……マンドゥール峡谷にしばらく滞在していたが、3月21日未明、ヨミYomi郡マイボゴ村の住民を無差別に惨殺した。公式発表によると、この虐殺により21名が死亡、10数名が重傷を負いクムラ Koumraの病院へ移送された。また147頭の牛が盗まれた。1993年にクー・ムアベ Kou Mouabé村で、軍人が75名の無抵抗の農民たちの喉をかき切った事件の後では、このマイボゴ村の悲劇は2つ目の虐殺事件を記録することになった。今回は牧畜民たちの、この地の住民に対する犯行である」⁶⁵。

4-2. 境界線を「創る」要因

こうした日常の対立を作り出している「南北」を隔てる境界線はどこにあるのだろうか。チャドの人々の意識にある「北」「南」の区分は、地理的・面積的に見るとかならずしも均等ではない。これまで見たように、1960年の独立からチャドは30年間に及ぶ長い内戦を経験した。国際メディアは、南北の紛争が長い政治混乱を説明する最適な理由だと見なす傾向があったが、チャドの現実がじつに多くの事象に起因し、複雑化していることを見ると、この二極化した視点は、あまりに簡素にすぎる。この南北対立のイメージは、一方でメディアによって、他方チャド人たち本人によって、それ自体が結晶化され、互いの敵意や憎しみを増幅する道具となってチャドの日常に覆いかぶさっているように思われる。

チャドは、独裁的指導者によるクーデターで政権がたびたび変わっている。国家論的観点から見れば、その強権的な抑圧によりかろうじて国家の

枠組みを保っている「失敗国家」と言える⁶⁶。このような国における、日常風景に現れる意識上の地域間対立は、強権政治の道具として独裁者に利用されやすい。第2章でみたように、こうした地域では、社会構造上、何世紀も前のイスラーム諸王国と南部地域の奴隷売買の歴史を呼び覚ますような対立が埋め込まれている。それゆえに、政治的意図による故意の扇動によって、政情の不安定化に拍車がかかるケースが、チャドのような失敗国家に多く見られる。近年は、マリやニジェールなどのサヘル諸国において、外部要因による国家枠組みのゆさぶりや政治の不安定化が発生しているが、内在する地域間対立など国家の脆弱な部分をさらに痛めつける構図となっている。

このようなシンボル化された「南」と「北」の対立は、他者に対する人々の心の中のイメージが常に先行するが、実際に現実社会を生きる人々はそうした単純化されたイメージをそのまま生きているわけではない。ある集団のアイデンティティが、異なったグループとの接触をきっかけに明確にされるとすれば、チャド南部のアイデンティティもまた、様々な他者（近隣の民族、イスラーム、植民地支配者、キリスト教宣教師など）とのコンタクトを経験する過程で形作られたものである。しかしながら、「南部人」は単純に一括りできるのではなく、ごつごつとしたいびつな地方ごとの民族的・文化的多様性を有する。集団のアイデンティティを考えると、いったい何を中心に人びとは集まり、どのような社会集団に対して帰属意識を感じるのかを問うことは、政治的意図で作られたイメージとの対比の上で重要である。

それぞれの社会集団の歴史、政治、社会的背景を考慮しなければ、こうした問いに答えることは難しい。「帰属意識」は、日常の具体的な問題に集団として対処するための使える道具であり、メンバー一人ひとりのアイデンティティを保障するシンボルである。チャドの歴代の政権は、各々の帰属意識を、政治的対立軸に仕立て、互いの憎しみをあおる形でしか国家形成を行ってこなかった。このような負の経験蓄積を、どのように人々は乗り越えればいいのか、その答えは容易には見つからない。

⁶⁵ N'Djaména Bi-Hebdo n°753

⁶⁶ 川端 2006: pp. 16-18.

結びにかえて

独立以来、チャド人たちは度重なる政治の失敗、貧困、治安の悪化、などに耐え忍んできた。長い内戦、国家の経済的・社会的機能不全、治安の悪化……息のつまるような環境の中で、人びとは欲求不満をさらに蓄積しつつある。この失望が、「北部人」、「南部人」の別なく、人びとをフラストレーションのはけ口として「南北対立」へとむけさせるのではないか。人びとの多くは、こうした不幸の原因を「他者」に求め、糾弾をさらに強めているように思われる。

イスラーム教を基盤としたイドリス・デビーの政治の失敗は、多くのイスラーム教徒にとって、自らのアイデンティティを傷つけ揺らがせる結果となった。イスラーム教徒たちは、自らのアイデンティティの均衡を回復しようと、非イスラーム教徒たちとの差異を引き合いに出す傾向がある。だがその一方で、イスラーム教徒の間でも、異なった宗派同士が対立することもある。ふたたびクドライによれば、一般的に、チャドには3つの異なったイスラーム宗派がある。ティジャニーヤ派 *Tijānniyya* とワッハーブ派 *Wahhabisme* は、多少なりとも原理主義的で伝統の改革を信奉している。3つ目には、ヨーロッパの高等教育を受けたイスラームエリートのカテゴリーがある。このグループは、精神的な礎としてイスラームを保持しつつも、宗教的見方を超える政治面においてヨーロッパ文化の積極的な面を取り入れ、政教分離を志向する。反対にワッハーブ派は、保守的な姿勢を保持する他の宗派への非難にそのアイデンティティの基盤を置こうとしている。このような特定のイスラーム教徒の意見や行動の急進化は、留まるところを知らない⁶⁷。

他方、非イスラーム教徒たちは、国内の結束の中心を求める現在の政権が推進するイスラーム化に対して恐れを持っている。国家のイスラーム化は、イスラームに属さない人々に対する疎外を生み出す。南部の人びとは、いわれのない不当な扱いを受けていると考えるのである⁶⁸。もし、都市

においても農村部においても、「南北紛争」がさらに深刻化し日常化するのであれば、こうした暴力に力を借りた自己の正当化は、決して共生的・民主的なシナリオにはたどり着くことは出来ない。

チャドにおける「政治権力」を表象するもっとも具体的なイメージを考えると、「鞭」が頭に思い浮かぶ。指導者たちは常に、鞭で無力な群衆を威嚇し支配する。この権力に対するイメージは、フランス植民地時代の「司令官」の地域住民に対する挙動に由来する。権力側と人びとの間に対話は存在しない。チャド人たちにとっての近代国家は、旧宗主国フランスの高圧的植民地支配と何ら変わりはない。彼らにとっての悲劇は、今日に至るまで、植民地支配の記憶に替わる真の民主主義の実例を知らないことであり、民主主義とは何かを理解する指導者に恵まれなかったことだ。その結果、新しい政権が現れるたびに、彼らは暴力に根ざした独裁の論理を再生産している。

クドライは、現実には「北」と「南」は歴史上それほど接触を持って発展してきたわけではなく、お互い真の対話がまだ不十分であると指摘している⁶⁹。それぞれが自らのうちにこもり、相手の否定的なイメージを増大させ、自らの不満を幻想として投影している。

だが、こうした内向きの状況を打破するために、少しずつではあるが対話の動きが観察される。異なった宗教間の対話を行なう場の設定に関しては、カトリック教会が宗教組織として自らの役割の重要性を認識していた。さらには、複数のイスラーム指導者が、政治と宗教の明確な分離を支持する立場を表明している⁷⁰。このように異なる立場の人々が、現状を乗り越えて対話を開こうとする努力は、いまだ微細であるが、現実を一つずつ変えようとする地道な取り組みである。このような試みからしか状況は打破できないのではないだろうか。

南部の各地方で、イスラーム諸国の援助で多くのモスク建設の勢いが増している。ときには南部の典型的な村全体が、様々な理由からイスラームに改宗するケースもある。特に、チャドの南部社会は商業活動と個人の富の蓄積を軽蔑する傾向が顕著で、商売に対する渴望は、イスラームに改宗する無視できない要因となっている。

Madjiro 2002a : pp. 283-296.

⁶⁹ Coudray 1992 : pp. 219.

⁷⁰ Ibid. pp. 221-222.

⁶⁷ Coudray 1992.

⁶⁸ 一方で、南部の住民自らがイスラームに改宗するケースもあり、問題は複雑を極める。この現象はチャド政府の思惑と、イスラーム諸国(サウジ・アラビア、クウェートなど)の援助という形での介入によって助長されている。

だが、国内的な対話を困難にする要因が他にもある。それは決して安定的とはいえない周辺諸国の政治状況とそれによる影響である。チャドにおいては、1960年の独立直後に見られた南部出身者の政府と北部イスラーム勢力の直接対立の構図は、その後すぐに北部の遊牧民のトゥブ人とゴラン人、のちにはザカワ人の対立となり、南北紛争から北・北紛争へと変化したことは先に述べた。本稿で詳しく述べることはできなかったが、チャドの独立後の混乱の背後には、リビア、ナイジェリア、スーダンなどの近隣諸国に加え、米国、フランスといった欧米諸国の介入が大きく影響を及ぼしている。またチャドが抱える現在の内紛は、スーダン・ダルフル地方におけるスーダン政府のザカワ人虐殺に関連して、デビー大統領の出身民族ザカワ同士が対立していることに端を発している。

さらに、2011年に勃発した「アラブの春」の動きの中で、リビアが瓦解したことで、地域の政治状況は大きく変わった。カダフィ大佐はこれまで、積極的にサブサハラアフリカ諸国のイスラーム化を支援してきた。またリビアはアフリカの「失敗国家」「崩壊国家」と呼ばれる国々からあふれ出る大量の人々を、労働者・傭兵として受け入れていた。リビアの崩壊に伴って、大量の移民が、蓄積されていた大量の最新兵器とともに国外に流出した。これがニジェールやマリなどサヘル諸国の政治の不安定化に拍車をかけている。この現状を見るに、近い将来、チャドにおいても同様の混乱が生じる可能性は日増しに高まっている。

本稿で見てきたように、複雑で根深い対立構造を抱えるチャドは、このような外部からの不安定要素の介入に対し大変脆弱である。一つの不満分子に財政・軍事支援を投入するだけで、不安定な国家の枠組みが即座に揺らぐことは、歴史が繰り返し教えている。分断の道具として利用される諸対立の契機は、現在も国内に存在している。その道具の利用を抑え込む、対話の試みは萌芽的には散見されるがいまだ弱い。周辺諸国における政治的流動性は、チャド国内の対立に直接的な影響を与えることは明らかである⁷¹。チャドが政治的安

定を確保するには、国内的対立の契機に注意を払うと同時に、それに対する周辺諸国の影響も考慮せざるを得ない難しい状況である。

アフリカ大陸全体の経済成長が注目される昨今、政治的・経済的に安定に向かう国と、不安定化が加速する国との格差はさらに開いていくと思われる。チャドをはじめとして、これまで見てきたような不安定化要因を抱えた周辺諸国の情勢を注視していく必要があるだろう。

(さかい まきこ・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

⁷¹ 2013年3月に隣国中央アフリカで軍事クーデターが勃発したが、12月現在、宗教をはじめ内在するさまざまな対立要因が武力紛争を引き起すという大変憂慮すべき事態になっている。

参考文献

【日本語文献】

- 小田英郎 [1986] 『世界現代史 15 アフリカ現代史 III - 中部アフリカ - 』、山川出版社。
- 川端正久 [2006] 「第 1 章 アフリカ国家論争を俯瞰する」川端正久・落合雄彦編『アフリカ国家を再考する』晃洋書房、pp. 1-81。
- 坂井真紀子 [2012] 「チャド民族解放戦線の結成とチャド内戦の勃発（一九六六年）」『岩波歴史史料』第 11 巻：20 世紀の世界 II 第二次世界大戦後 冷戦と開発、pp.176-178。
- シーガル、ロナルド[2007]『イスラームの黒人奴隷—もう一つのブラック・ディアスポラ』明石ライブラリー109、明石書店。
- 島田周平 [1992] 『地域間対立の地域構造—ナイジェリアの地域問題』、大明堂。
- 嶋田義仁 [2010] 『黒アフリカ・イスラーム文明論』創成社。
- 武内進一 [2008] 「チャドの不安定化とダルフル紛争」アフリカレポート、No.47、アジア経済研究所、pp. 9-14。

【フランス語文献】

- Arditi, Claude [2003a] « Les violences ordinaires ont une histoire : le cas du Tchad », in *Politique africaine* n° 91, octobre, pp. 51-67.
- [2003b] « Les conséquences du refus de l'école chez les populations musulmanes du Tchad au XXème siècle », in *Journal des africanistes*, 73(1), pp. 7-22.
- Azedev, Mario [1981] « The human price of development », in *African studies review*, vol. XXIV, n°1, March, pp. 1-18.
- Buijtenhuijs, Robert [1990] « Le Frolinat : Mouvement Islamique ou Mouvement de musulmans ? », in *L'Islam au Tchad*, J.-P. Magnant (dir.), Centre d'Etude d'Afrique noire, IEP, Bordeaux, Université de Bordeaux I, pp. 127-138.
- [1987] *Le Frolinat et les guerres civiles du Tchad (1977-1984)*, Paris, Karthala – ASC, , 479p.
- [1978] *Le Frolinat et les révoltes populaires du Tchad, 1965-1976*, Mouton, The Hague-Paris-New York, 1978, 526p.
- Correau, Laurent [2008] *Goukouni Weddeye – Témoignage pour l'histoire du Tchad*, Paris, Radio France International (RFI).
- Coudray, Henri [1998] « Langue, religion, identité, pouvoir : le contentieux linguistique franco-arabe au Tchad », in *Contentieux linguistique arabe-français*, Centre culturel Al Mouna, pp. 19-69.
- [1992] « Chrétiens et musulmans au Tchad », in *ISLAMOCRISTIANA*, Roma, Pontificio Istituto di studi arabi e d'islamistica, n°18, pp.175-234.
- Djarma, Al Hadji Garondé [2003] *Témoignage d'un militant du FROLINAT*, Paris : Pour Mieux Connaître le Tchad (PMCT) – L'Harmattan.
- Hallaire, Jacques [1998] *Naissance d'une Eglise africaine, Lettres et chroniques du pays sar, Tchad (1952-1989)* Collection Chrétiens en liberté, Paris : Karthala.
- Khayar, Issa H. [1976] *Le refus de l'école, Contribution à l'étude des problèmes de l'éducation chez les musulmans du Ouaddaï (Tchad)*, Paris : Librairie D'Amérique et d'Orient.
- Koji-Yorongar, N. Le Moiban [1996] « Trenteans de chant tragique pour l'unité », in «*Conflit Nord-Sud » Mythe ou réalité ?* », N'Djaména, Centre culturel al Mouna, pp.97-116.
- Lamama, Abdoulaye [1996] « L'ad, inistration traditionnelle bousculée par la colonisation : l'apport ambigu de la France » in «*Conflit Nord-Sud » Mythe ou réalité ?* », N'Djaména, Centre culturel al Mouna, pp.21-29.
- Lanne, Bernard [1984] « Le Sud, l'Etat et la révolution », in *Politique africaine*, n°16, Paris, Karthala: pp. 30-44.

- Yacoub, Mahamat Saleh [1990] « L'Islam et l'Etat en République du Tchad », in Magnant (ed.), *L'Islam au Tchad*, Centre d'Etude d'Afrique noire, IEP, Université de Bordeaux I: pp.93-98.
- Madjiro, Raymond Naingaral [2002a] « Pour une nouvelle solidarité en Afrique : relecture dix ans après », in *Tradition plurielle du Tchad : Travaux anthropologiques d'étudiants*, Grand Séminaire de N'Djaména, édité par Jacques Fédry, avec le concours d'Antoinette Hallaire, Presses de l'UCAC, Yaoundé : pp. 183-186.
- Magnant, Jean-Pierre [1989] « La conscience ethnique chez les population sara », in J.P. Chrétien et G. Prunier (dir.), *Les ethnies ont une histoire*, Paris : Karthala-ACCT , pp. 329-336.
- [1986] *La terre sara terre tchadienne*, Collection Alternatives Paysannes, Paris : l'Harmattan,.
- Magrin, Géraud [2001] *Le Sud du Tchad en mutation, des champs de coton aux sirènes de l'or noir*, Paris :SEPIA.
- Mohamed Ali Ataher Insar [1990] « La scolarisation moderne comme stratégie de résistance » in Revue du monde musulman et de la Méditerranée, N°57, Paris, pp. 91-98.
- Sakai, Makiko [2008] *Le développement par les organisations paysannes : Analyse des « interventions participatives » dans le sud du Tchad*, (Thèse de doctorat), Université Paris I – Sorbonne / Institut d'Etude pour le développement Economique et Social (I.E.D.E.S.) .

【新聞】

N'Djaména Bi-Hebdo, n°753, du 29 au 31, mars 2004.



出所 : Atlas de L'Afrique - Tchad - , Les Editions J.A., Paris, 2006, p.25.